

はしがき

この報告書は、愛知大学人文社会学研究所主催・「社会と基盤」研究会共催のもと、2016年9月17日に開催されたワークショップ「マテリアリティの政治と『インフラ論的転回』——社会の近代性を支えるヒト・モノへの問い」の記録を収録したものである。本ワークショップの企画趣旨や内容については本編に譲り、ここでは、本ワークショップの開催に至る経緯について、若干の補足を述べておきたい。

2011年3月11日に発生した東日本大震災に端を発する出来事の連鎖は、ヒト・モノの複合体から成るインフラストラクチュアに一体不可分な形で支えられてきた現代社会の姿を否応なく明らかにした。こうした現実に対峙するなかで、2011年4月に発足した「社会と基盤」研究会（研究代表者：町村敬志、科研費基盤研究B（課題番号23330157）および科研費基盤研究A（課題番号26245057））では、東日本大震災のもとで生じた出来事の連鎖を総体として記録すべく『東日本大震災クロニクル2011.3.11-2011.5.11』（発災後2ヶ月間に起きた出来事約11000件を掲載）を作成するとともに、それを分析しうる社会理論の彫琢が試みられてきた。この理論的作業は、2013年12月～2014年2月に一橋大学にて開催された連続ワークショップ「インフラストラクチュアからみる現代社会の編成／再編成——出来事、風景、統治性」（文部科学省「平成25年度卓越した大学院拠点形成支援補助金」平成25年度一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程研究活動助成）、および、それを基に企画された「社会と基盤」研究会の英文電子ジャーナル *Disaster, Infrastructure and Society (DIS)* No. 6 の特集： *Infrastructure Politics* とも連動して進められた。本ワークショップは、当初、こうした一連の理論的作業の延長上に企画され、登壇者は *DIS* No. 6 の原稿を事前資料として共有のうえ当日の議論に臨んだ。本報告書とあわせて *DIS* No. 6 を参照いただければ、当日の議論の文脈がより伝わるものと思う。

本ワークショップにおける議論の焦点のひとつは、〈社会なるもの〉の自明性や人間主体の特権性を排する Actor Network Theory や assemblage アプローチの含意について、社会学、哲学、人類学を含めて領域横断的に検討することにあつた。折しも愛知大学では、「内外の研究者を組織し、人文社会学の諸領域に関する基礎研究の推進を可能ならしめる」べく、2015年4月に愛知大学人文社会学研究所が設立され、その設立目的には「これまでの人文社会学研究の方法を批判的に継承しつつ、新しい知の在り処をもとめ、地域や世界に向けてこれを発信」することが掲げられた。もっぱら人間のみから成る社会や世界を想定してきた既存の人文社会学の前提を根源的に問い直し、ヒトとモノの双方を射程に含む領域横断的な知のあり方を構想する本ワークショップの企画趣旨は、この設立目的とも合致するものであつた。そこで本ワークショップは、愛知大学人文社会学研究所主催ワークショップとしての位置づけを得るところとなつた。

以下に掲載するワークショップの記録は、当日の録音データを文字に起し、それを再構成したものである。ただし、事後的な加筆修正は最小限に留め、登壇者の発言をできる限りそのまま掲載することに努めた。そのため、かえって論旨が分かりにくくなった箇所もあるが、ここではむしろ、当日の議論の臨場感を再現することを優先した。

最後に、登壇者の皆様、また本ワークショップの開催にあたってさまざまにご支援いただきました皆様に、心よりお礼を申し上げます。

2017年3月 編者